

ウェルビーイングの測定と理論 ーアレクサンドロワの議論を中心にー

Measurements and theory of well-being :Focusing on Alexandrova's arguments

桐 村 豪 文*

Takafumi KIRIMURA*

要 旨

本稿では、社会的な取り組みがまさに社会にもたらす価値について評価するうえで、大いに示唆を与えてくれる「ウェルビーイング」をめぐる理論について、アレクサンドロワの議論を中心に考察を行った。社会的な取り組みの評価が抱える難題は、「普遍性」の信念を固守しながらも、「多元性を開く普遍」でなければならないという困難な緊張関係のもとにおける理論構築の必要性である。そのうえで、本稿が紹介するアレクサンドロワ提案の中位の理論は、まさに文脈に応じたウェルビーイングの「可変主義」と「構成概念の多元主義」を満たしながら、しかし同時に、特定の集団に対して道徳的に関与する「普遍性」の余地も残すものとなっている。

キーワード：ウェルビーイング、測定、構成概念、評価尺度、可変主義、中位の理論

はじめに

ある社会的な取り組みを評価するとき、その評価はどのようなものであるべきだろうか。これは、国や自治体が行う政策に対する評価に限ったものではない。個人が他者との関わりの中で行う取り組みや、民間団体や大学等の機関が行う取り組みもその対象である。もちろんその為せることの専有性や規模、メニューの多さ、影響力の大きさ等からして、国や自治体による取り組みが議論のより中心にあるのはその通りだろうが、とはいえそれらに対象を限定する必然性はなく、むしろそれらを「社会的な取り組み」として包括的に捉えられるような理論の構築が望ましく思われる。

その上で、このような社会的な取り組みの評価は、国や自治体の政策評価をはじめ、一定の蓄積があり、活動サイクルの一部としてすでに定着しているように思う。そして評価の方法についても、一定の型が広く共有されており、すでに抗しがたい自明性があるように思われる。

このような評価の在り方については、もちろん常に

改訂の可能性に開かれており、そして一般的なのは、その評価方法の妥当性に着目して、検討を加えるといったものだろう。しかし、評価の在り方をめぐって目を向けるべきは方法だけに限らず、「そもそもなぜそのような評価が求められるのか」という目的に関わる議論も重要である。

評価は、評価すること自体に目的があるのではない。また、国や自治体の政策を正当化し、次年度に向けた予算折衝で財政当局を説得するための道具として役立てるという目的も、目的の一つとしてあれ、そのすべてではなく、むしろ本来の目的のごく一部に位置づけられるべきものである。社会的な取り組みの評価は、本来、「それによって社会はより良くなったか？」という素朴ながら根源的な問いが常に中心に据えられてあるべきものである。この問いへの応答的熟慮を経たうえで評価の具体を設計する必要がある。そうでなければ、いくら評価の努力を繰り返しても、それによってもたらされるのは限定的な目的の範囲内における部分最適だけである。

この素朴ながら根源的な問いは、その素朴さゆえに

* 弘前大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Hirosaki University

取り扱い注意であり、とりわけ相対主義という難敵がすぐそこに控えているため注意が必要である。それは、社会的な取り組みの良し悪しは特定の尺度で単純に評価し、比較できるようなものではなく、個人や社会が持つ価値の多様性や多元性に依拠して相対的であり、それゆえ複数の時点、場所の間で社会の進化を客観的に測定できると期待して評価に臨むことは、そもそも不可能であり不適切であるという考えである。

筆者はこの考えに対し、先の素朴な問いに固執して抗いたい。それは「普遍性」の信念を固守するものである。井上達夫が「現代世界における「普遍の死」をもたらしているのは、現実政治の諸力の横暴化だけでなく、普遍的原理を支えた思想の衰退である」（井上 2019, p. vii）と述べているように、この素朴な問いに取り組むために必要なのは、「普遍的原理を支える思想」である。

とはいえ、仮に普遍的原理が何ものか特定され、評価の観点として具現化されるとなれば、どうなるだろうか。普遍性ゆえに、その観点によって社会的な取り組みの一つひとつの正否が判断されること（強権的な顔を潜ませる評価体制）になるだろうか。ここで問題になるのは、やはり価値の多様性や多元性との調和のとり方である。それはつまり、「多元性を開く普遍」（井上 2019, p. 258）という構えである。「生と性の多様な在り方の追求を尊重しつつ、一部の人の自己実現のための自由な実践が、そのコスト（略）を転嫁させられる側から見ても公平として受容しうるような公共的な正当化可能性をもつか否かを批判的に吟味する姿勢を貫徹すること」（同上）の必要性である。

そこで本稿が着目するのが、「ウェルビーイング」の概念であり、中でも「高位の理論（high theories）」ではなく「中位の理論（mid-level theories）」を追求する哲学者アレクサンドロワ（Anna Alexandrova）の議論を提示したい。

1. 「ウェルビーイング」への注目の高まり

アレクサンドロワによれば、「ウェルビーイング」と「ハピネス」を検索すると、比較的小さいながらも重要な社会科学研究ネットワークのデータベースで約7,000件の論文が見つかり、すべての医学文献の巨大なデータベースであるPubMedで約200万件の論文が見つかる。ウェルビーイングは、1998年から2005年の間に社会科学引用指数と科学引用指数で引用されたすべての心理学記事で2番目に人気のあるキーワードである。特にウェルビーイングに焦点を当てたジャーナ

ルは分野を超えて増加しており、著名な学者による大衆向けの本もそうである。ScienceやNatureなどの伝統的なハードサイエンスジャーナルでさえ、現在ではウェルビーイングに関する記事を掲載している」（Alexandrova 2014, p. 10）という。また、「ウェルビーイングの科学は現在、専門学会、専門誌、研究機関、Scienceなどの主要な場所での出版物を誇っている。量もかなりある。「ウェルビーイング」とその同族語は、科学抄録のキーワードリストの上位に常にランクインしており、「ウェルビーイング」だけでもPubMedに500万件以上のエントリーがあり、これは「がん」の2倍である」（Alexandrova 2017, p. xix）という。

国家が公共政策として国のウェルビーイングを捉えようとする試みも多数見ることができる。2009年に3人の著名な経済学者、ジョセフ・スティグリッツ、アマルティア・セン、ジャンポール・フィトゥシは、ニコラス・サルコジ仏大統領の委託により、国のウェルビーイングを多面的に測定する方法を概説する報告書を作成した。それ以来、中央政府および州政府は、ニュージーランド、ブータン、カナダ、アラブ首長国連邦、カリフォルニア州サンタモニカ、オーストラリア首都特別地域、タスマニアなど、独自のウェルビーイング指数の開発に忙殺されている。ただ、これらの指標は、ウェルビーイングに関する特定の理論に依存することはめったにない（Alexandrova & Fabian 2022, p. 24）。

ユニセフや国連機関などの国際機関やNGO、また主要な慈善団体や財団においても、ウェルビーイングに関する測定やサーベイがまとめられている（Alexandrova 2014, p. 10）。

このような取り組みは、「測定の拡張の物語でもあり、これまで個人的で、特異で、測定不可能と考えられていた現象の定量化の物語でもある」（Alexandrova 2017, p. xviii）。ウェルビーイングを定量化することは、昔から、哲学や経済学、社会科学の世界において野望だった。しかしそれにもかかわらず、それらの試みは風変わりな理論家とユートピアの領域のまま、ウェルビーイングとハピネスは主に芸術、文学、哲学、宗教、および個人的な考察の主題であり続け、測定は重要ではなかった。それが変化し始めたのが、20世紀後半以降のことである。（Alexandrova & Singh 2022, p. 181）

幸福の経済学（happiness economics）は、リチャード・イースターリン（Richard Easterlin）が、

GDP の成長は長期的には人生の満足度を向上させないように見えると述べたときに始まった。イースターリンは、1974年の研究で、世論調査のデータを用いた人生の満足度と GDP の関係の分析から、所得は国内の満足度の違いを説明する一方、国の間の違いを説明しないことを発見した。この発見は「イースターリンのパラドックス」として知られるようになった (Alexandrova & Fabian 2022, p. 8)。イースターリンがここで提示したのは、(1) いつでもどの国でも、所得は自己申告による幸福度を予測するということが、(2) 時間の経過とともに所得が増加しても幸福度はそれに応じて上昇しないということである。イースターリンは、一定の最小値を超えると、人は自分の幸福度を絶対的な収入ではなく相対的なもので判断すると仮定した。この考えは、客観的な状況と人生の評価との関係、それを超えるとお金には何の影響も及ぼさない飽和点、および幸福度の判断の心理学に関する多くの研究に拍車をかけた (Alexandrova 2017, p. xviii)。1990年代から2000年代初頭にかけて、イースターリンのパラドックスは、ウェルビーイングの科学の政策的妥当性を正当化する役割を果たしてきた。ウェルビーイングを研究するための多くの記事、本は、イースターリンの画期的な研究を引用することから始まった (Alexandrova & Singh 2022, p. 185)。

2. ウェルビーイングの科学をめぐる課題

アレクサンドロワによれば、ウェルビーイングの科学は、価値を含まないものではありえず、ゆえに、ウェルビーイングについての適切な知識を生み出すには、彼女が「価値適性の問題 (Question of Value-Aptness)」と呼称する問題に対峙しなければならないという (Alexandrova 2017, p. xxx)。そしてこの課題については、次の3つの問題に答える必要があるという。

1. 所与の科学プロジェクトにおいてウェルビーイングをどのように定義すべきか。
2. ウェルビーイングはどのように測定する必要があるか
3. ウェルビーイングの科学は、価値に直面しても客観性をどのように維持できるか。

哲学者はウェルビーイングを定義することに関心があり、科学者はそれを測定することに関心があるため、これら3つの問題については分業の可能性が示唆

されるが、アレクサンドロワいわく、残念ながら、この分業の提案は最初から失敗に終わっているという。ウェルビーイングの定義がウェルビーイングの科学で実際に利用可能であるためには、規範的理論だけでなく、知識の測定と使用の実際的な制約にも敏感でなければならない、したがって分業によって完遂されるものではない。では哲学者は理論化に際して後者の経験的な制約にも敏感に対応できているかというと、そうでもない。 (Alexandrova 2017, p. xxx)

アレクサンドロワが「哲学と科学」の断絶と呼んでいるのはこれである。哲学者によって構築された価値の理論は、科学の世界で「ウェルビーイング」と呼ばれるものと非常に希薄な関係しか持っておらず、哲学者が構築した理論の科学への適用可能性は謎のままであり、さらに、そもそも科学者は哲学者にはほとんど関心がないようである。「科学者は明らかに、哲学理論を彼らの構成概念に最終的かつ完全な正当化を提供するものとして扱っていない。彼らの目標は日和見主義的で、アイデアやインスピレーションを求めて買い物をするだけである」 (Alexandrova 2017, p. 38)。

ここでこの断絶する関係を調和するためにアレクサンドロワが提示するのは、ウェルビーイングの「理論 (theory)」、「構成概念 (construct)」、「評価尺度 (measures)」の区分である。これらの間には、3つの決定的な相違があるという。大雑把に言えば、理論は哲学者の関心事であり、構成概念と評価尺度は科学者の関心事である。ウェルビーイングの理論とは、ウェルビーイングの本質的な特性、つまり他のものではなく、それをウェルビーイングにするものを研究することである。「構成概念」という用語は、属性または現象の別の呼称にすぎず、科学研究の対象者のウェルビーイングの状態をいうものである。構成概念は通常観察することができないが、さまざまな観察可能な兆候はある。例えば、うまくいっている人は自殺する可能性が低い。評価尺度は、構成概念の観察可能な指標である。たとえば、アンケートのスコアがそのような指標になる場合がある。このアンケートが健康状態の検出に本当に優れている場合、この構成概念の有効な評価尺度であると言われる (Alexandrova 2014, pp. 12-13)。

「価値適性の問題」に取り組むには、これらの理論、構成概念、評価尺度を相互に適切に関連付ける必要がある。評価尺度は構成概念を確実に追跡する必要があり、構成概念の選択は理論によって適切に知識を与えられていなければならない。しかしながら、先述

の通り、哲学によってこれまで構築されてきたウェルビーイングの理論は、科学における構成概念や評価尺度の開発を適切に導くことができてこなかった (Alexandrova 2017, p. xxxii)。それはなぜか。

哲学者は、第1種のウェルビーイングについてのみ理論化し、第2種のウェルビーイングについては理論化していないからである。ここでいう第1種のウェルビーイングとは、一般的な文脈で、エージェントのすべてのことを考慮した全体的なウェルビーイングである。その人の人生で重要なことをすべて考慮に入れ、各報告でどのように行動したかを評価し、すべての重要な要素を集約して全体的な判断を下すように求められる文脈である。これに対して第2種のウェルビーイングとは、特定の文脈に固有な評価を呼び起こし、特定の種類のウェルビーイングが問題となる。

哲学者は、あたかも第1種の一般的なウェルビーイングだけがウェルビーイングの概念であるかのように振る舞うことがある。しかし、生命、科学、および政策において、そのような一般的な焦点は実際には非常にまれである。ほとんどの場合、私たちはより狭い概念を使用して、文脈固有のウェルビーイングの判断を下す。「東ヨーロッパのある場所の孤児院から引き取られたばかりのダウン症の幼児は、どのように過ごしているか？彼はまだ極度の栄養失調で衰弱しているか？彼はまだ天井を見つめて一日を過ごしているか？彼はまだ頭を壁にぶつけているか？彼は人々を信頼することを学んでいるか？笑顔と遊び方を学んでいるか？」 (Alexandrova 2014, p. 15) 他の子ではなくこの子についてこれらの問いをするという事実そのものが、私たちが一般的な評価ではなく、文脈に基づいた評価を行っていることを示している。

全体的なウェルビーイングと文脈に応じたウェルビーイングの区別は、単に一般的なものと特定のものととの区別であり、特定の文脈に応じたウェルビーイングが集まって一般的な全体的なウェルビーイングを構成すると考えられるかもしれない。しかし、この考えは役に立たない。ウェルビーイングについての哲学者の概念は、1種類の評価、つまり一般的な種類の評価だけに関係している。文脈に応じた評価にはさまざまなルールがあり、哲学理論を見ただけでは検出することはできない (Alexandrova 2014, p. 15)。

3. 文脈に応じたウェルビーイング：中位の理論の構築

文脈によって異なるのは、ウェルビーイングの定義ではなく、ウェルビーイングの評価尺度にすぎないと

考えるかもしれない。この見方では、ウェルビーイングの構成概念は状況によって変化せず、評価尺度のみが変化するため、この見方をアレクサンドロワはウェルビーイングについての「不変主義 (invariantism)」と呼称する。 (Alexandrova 2014, p. 15)

アレクサンドロワは、文脈によって異なるのは評価尺度だけでなく、「ウェルビーイング」と呼ばれる実際のものである可能性を考慮する必要があるとの考えを提示する。おそらく、概念が一般的に使用されているときのウェルビーイングは、さまざまな文脈での概念の使用がさまざまな側面に焦点を当てることができる、さまざまな異なる側面を包含する緩やかな概念である。この見解をアレクサンドロワは、ウェルビーイングについての「可変主義 (variantism)」と呼ぶ。

この見解によると、私たちはウェルビーイングの概念をそれが使用される状況に合わせて調整する必要がある。まず、さまざまな状況では、さまざまなウェルビーイングの閾値が適用される。「緊急難民キャンプでうまくやっていくことは、西洋の中産階級のコミュニティでうまくやっていくことよりも敷居が低いかもしれない」 (Alexandrova 2014, p. 16)。第二に、ウェルビーイングそのもの、または哲学的な用語で言えば、ウェルビーイングの構成要素は、状況に依存するということである。例えば「個人の価値の実現」は、大人のウェルビーイングを構成するかもしれないが、子どものウェルビーイングではそうでないかもしれない。他方で「遊び」はその逆かもしれない。可変主義の考えでは、すべての文脈に適用可能なウェルビーイングに関する単一の正しい理論は存在しない可能性があると主張する。 (Alexandrova 2014, p. 16)

実際、ウェルビーイングの科学を見ると、非常に多様な文脈に応じた定義と評価尺度が見られる。表1に示すように、心理学だけでもウェルビーイングを定義し、測定するための3つのアプローチがあり、経済学では2つ、その他にも政策科学や医学において独自のプロジェクトが展開されている。いくつかの定義は、人々の生活に関する主観的な判断のみを表しており、他の定義は客観的な生活の質の要素を含んでいる。被験者の感情や感情のみに基づいているものもあれば、認知的判断に基づいているものもある。その結果、さまざまなものが「ウェルビーイング」と呼ばれる実態がここにはある。老年学と医学でウェルビーイングを表すと言われている構成概念は、開発経済学と児童心理学の構成概念とは著しく異なる。それらは、同じ研究分野の異なるサブフィールド内でも大幅に異なる場

合がある。アレクサンドロワが「構成概念の多元主義 (construct pluralism)」と呼んでいるものは、ウェルビーイングの科学が広く普及していることを特徴的に示すものである (Alexandrova 2017, p. xxxv)。

表1 社会科学のさまざまな分野におけるウェルビーイングのさまざまな概念

	理論	構成概念	評価尺度
心理学	快楽主義	平均効果	経験サンプリング、U-Index、ポジティブおよびネガティブ感情尺度、SPANE、主観的幸福度尺度、感情強度尺度
心理学	主観主義 (または欲望の充足)	主観的満足度 (人生の満足度)	ライフスケール満足度、カントリルラダー、ドメイン満足度、世界価値調査、ギャラップ世界世論調査
心理学	ユーダイモニズムまたは卓越主義	持続的幸福 (flourishing)	セリグマン (Martin Seligman) の PERMA、リフ (Carol D. Ryff) の心理的ウェルビーイング指数、ユペール (Felicia Huppert) の持続的幸福尺度
経済学	主観主義	選好満足	GDP、GNP、家計所得と消費
開発経済学	客観的リスト理論	生活の質	人間開発指数、ダスグプタ指数、さまざまなケイパビリティ評価尺度
政策科学	プラグマティックな主観主義	国民のウェルビーイング (国民の多くの価値に関するコンセンサス)	英国国家統計局国民ウェルビーイング、レガトゥム繁栄指数、社会進歩指数、OECD より良い生活指数
老年学と医学		さまざまな社会的および医学的状況下での生活の質	ノッティンガム健康プロフィール、病気影響プロフィール、世界保健機関の生活の質、健康関連の生活の質、QUALEFFO
児童科学		子どものウェルビーイング	米国保健社会福祉省児童局の子どものウェルビーイング評価尺度 (3つの評価領域: 家族、教育、メンタルヘルスと身体的ニーズ)、ユニセフの世界子ども白書、親の評価、スターリング児童福祉尺度、およびその他の尺度

【出典】Alexandrova 2014, p.17の表と Alexandrova 2017, p.xxxviの表を筆者が統合・加工。

ウェルビーイングの構成概念の多元主義を受け入れ、指導的な理論に依存しない道を選ぶ場合、科学者はどのようにして自らのプロジェクトに適したウェルビーイングの構成概念を選択するのが適切だろうか。

ウェルビーイングに関する標準的な哲学理論である快楽主義、主観主義、ユーダイモニズムをアレクサンドロワは「ビッグ3」と呼称する。ビッグ3は、特定の文脈を持たない、可能な限り広い意味で

の人物に関するものであるという点で、高位の理論 (high theories) であるという (Alexandrova 2017, p. xxxix)。「ウェルビーイングの哲学理論には、文脈や変化の余地はない。(略) ウェルビーイングの哲学理論は、最も抽象的で一般的な意味での良心的価値の理論を追い求めているため、それら文脈や変化は正確には見えないのである」(Alexandrova 2014, p. 16)。

ウェルビーイングに関する伝統的な理論が機能する高いレベルの抽象化と、ウェルビーイング政策、公衆衛生、およびサービス提供の実際的な目標との間には、著しい断絶がある。実践的な取り組みは、通常、一般的な人間を対象とするのではなく、さまざまな人々やさまざまなコミュニティ、困っている子ども、脆弱な大人、福祉を受けているひとり親などを対象としている。ウェルビーイングの抽象的な理論を特定のケースに適用することは単純なことではなく、むしろ文脈に具体的に適した理論を追求することが理にかなっている。そのような理論は、すでに健康科学の分野では多く存在しており、そこでは、生活の質の評価尺度がある特定の状態で生きる患者に対して注意深く適応され、また障害を抱えながらどのようにして持続的幸福を得ることができるかという問題に特に関心が集中する。アレクサンドロワは、ここで、責任あるウェルビーイングの研究と政策には、一般的に適用されると考えられている典型的な高位の理論とは異なり、文脈によって相対化された理論である中位の理論 (mid-level theories) が必要であると主張する (Alexandrova & Fabian 2022, p. 31)。

高位の理論と区別される中位の理論は、さまざまな状況における、さまざまな種類の人々の、多くの場合グループの、ウェルビーイングに関するものである。「子ども、福祉制度の子ども、元子ども兵、働く母親、病気の世話人、ブレイグジット後の英国など」(Alexandrova 2017, p. xxxix)。これらの種類は、私たちの科学的プロジェクトおよび政策的プロジェクトが必要とするものに合わせて一般的でありうるし、また特定のでありうる。中位の理論は、所与の環境でこれら各種の実際の持続的幸福の条件に関わるものである。

これらは高位のビッグ3の理論と、実用的および科学的な文脈における非常に具体的なウェルビーイングの評価尺度との間に位置するため、中位である。確かに、中位の理論は高位の理論に依存しているが、両者は評価基準を完全に共有しているわけではない。高位の理論の目標が、ウェルビーイングに関するできるだ

け多くの異なる判断を体系化して、最大限に単純で一貫性があり、強力な命題のセットにすることである場合、中位の理論は必ずしも必要ではない。中位の理論は、一部を体系化するだけでなく、独自の目標も持っている。最も重要なことは、社会的測定と適用を可能にし、導くことである。

では、中位の理論はどこからやって来るのだろうか。それは暗黙のうちにすでに存在しているという。アレクサンドロワはこれを説明するため2つの例を挙げている。子どものウェルビーイングの専門家が遊びと愛着に注意を向ける一方で、国民のウェルビーイングの専門家が資源の持続可能な利用に焦点を当てているというのは、暗黙の中位の理論である。しかし、これらの理論はしばしば十分に説明されておらず、測定、政策目標、ビッグ3との関連性の説明も十分ではない。それらは、構成概念の多元主義が正当化されるために必要なのである。

高位の理論、中位の理論、構成概念、評価尺度の関係は、図1のように考えられる。高位の理論は、後者の定式化を可能にする概念的なツールを提供することにより、中位の理論にインスピレーションを与える。中位の理論は、ウェルビーイングのさまざまな構成概念を正当化するが、さまざまなスケールが構成概念の測定を可能にする。関係が異なるため、矢印はそれぞれのケースで異なる。インスピレーションを与えることは正当化することではなく、測定することでもない。また、1つの高位の理論が2つの異なる中位の理論にインスピレーションを与える可能性がある（またはまったくない）ことにも注意が必要である。単一の中位の理論で複数の構成概念が正当化される可能性があり、単一の構成概念が複数のスケールで測定される場合もあれば、評価尺度がまったくない場合もある。

アレクサンドロワの提案では、高位の理論ではなく中位の理論が中心的な役割を果たすという。それらはウェルビーイングの科学を価値のあるものにするのを可能にし、どれほど複雑であっても、他の高位の理論よりもはるかに緊急の課題であるという。(Alexandrova 2017, pp. xxxix-xli)

中位の理論を構築するには、必然的に、特定の種類のメンバー（「子ども」、「障害者」、「貧困者」、「コーンウォールの居住者」など）として生きることの現実を経験的に関与する必要がある、そしてどのような種類のウェルビーイングが彼らのために促進する価値があるかという問題に道徳的に関与する必要がある。こ

れをうまく遂行することで、すべてのものを考慮した意味でのウェルビーイングから、何かを考慮した意味でのウェルビーイングへと抽象化のはしごを降りることができる。実際にこれを行うには、ウェルビーイングの学者と、問題の種類のメンバーであるという生きた経験を持つ人々の両方を含む、創造的な理論構築演習が必要である (Alexandrova & Fabian 2022, pp. 31-32)。「ウェルビーイングに関する中位の理論を構築するのは大変な作業である。それは、下（既存の経験的基盤）と上（関連する高位の理論）の両方から取り組み、(略) 2つを統合する必要があるからである」(Alexandrova 2017, p. xlii)。

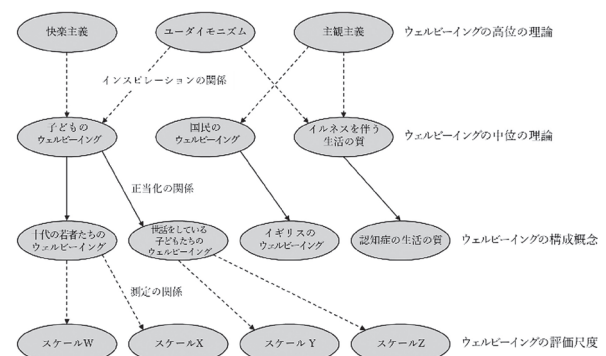


図1 高位の理論と中位の理論と構成概念と評価尺度の関係
【出典】Alexandrova 2017, p.xl

おわりに

本稿では、社会的な取り組みがまさに社会にもたらす価値について評価するうえで、大いに示唆を与えてくれる「ウェルビーイング」をめぐる理論について、アレクサンドロワの議論を中心に見てきたところである。冒頭で問題にしたのは、「普遍性」の信念を固守しながらも、「多元性を開く普遍」でなければならないという困難な緊張関係のもとにおける理論構築の必要性であった。そのうえで、本稿が紹介するアレクサンドロワ提案の中位の理論は、まさに文脈に応じたウェルビーイングの概念の「可変主義」と「構成概念の多元主義」を満たしながら、しかし同時に、特定の集団に対して道徳的に関与する「普遍性」の余地も残すものとなっている。

そもそも筆者がウェルビーイングに着目したのは、米国や英国を中心に進められてきた、我が国においても昨今注目されている「エビデンスに基づく政策と実践 (Evidence-Based Policy and Practice: EBP)」について、その必要性や有用性を、「何がうまくいくか (what works)」と表され、平均的な効果量によって

測定される有効性や効率性といった観点は異なる評価軸によって評価することはできないかと模索してきたことが背景にある。EBP 反対派の教育学者の多くは、教師の専門職としての裁量の幅が制限される点において EBP を拒むのだが、しかし直接的に重要なのは教師の裁量の大きさではなく、子どものウエルビーイングであろう。もちろん子どものウエルビーイングの充実にとって教師の裁量が大きく関与することが明示されるならば、その保障が重要となる。しかしまず目を向けるべきなのは子どものウエルビーイングであり、教師の裁量は副次的なものである。そしてまた、EBP の取り組みの形態も多様性をもっており、したがって、EBP に対して批判的に投げかけられるべき問いは、「EBP は子どものウエルビーイングを向上させるか」ではなく、「どのような EBP が子どものウエルビーイングを向上させるか」である。これを検討するには、まず「子どものウエルビーイング」に関する中位の理論を構築するという大変な作業に取り組む必要がある。

この作業に取り組むにあたって、まず参照点として有益であろうものは、OECD が2021年に発行した報告書『子どものウエルビーイングと政策にとって何が重要かを測定する (Measuring What Matters for Child Well-being and Policies)』において提示された「子どものウエルビーイングの測定フレームワーク」である。図2がそれである。この「フレームワーク」の出発点は、多面的（子どもたちの生活のさまざまな側面を含む）で将来を見据えた、子どもたちのウエルビーイングの概念」（OECD 2021, p. 16）であり、そして「子どものウエルビーイングのアウトカムと潜在的な推進力および影響の両方をカバーする、マルチレベルまたは「生態学的」構造を採用」（OECD 2021, p. 17）するものとなっている。これが果たして中位の理論として十分に機能するものとなりうるのか。この課題については、別稿にて検討したいと思う。

測定の現実として、もう一つ困難を挙げるならば、有用性と厳密性のトレードオフの関係である。これをアレクサンドロワは「レットウィンのジレンマ」と呼んでいる。「ウエルビーイングの評価尺度が「本当のもの (real thing)」に到達するかしないかという議論は的外れである。科学と政策は、本当のものを追い求めるのではなく、ウエルビーイングの再定義を追求する。それは、親概念の一部を維持しながら、測定可能な世界の現象を選び出し、それを比較可能で譲渡可

能にするものである。これは、デーヴィッド・キャメロン政権下で政府政策担当大臣を務め、キャメロンの有力なアドバイザーであるオリバー・レットウィン (Oliver Letwin) の証言に最も明確に表れている主張である」(Alexandrova & Singh 2022, p. 189)。「ウエルビーイングの数値は人為的であり、本当のことを歪め、予期せぬ結果をもたらす可能性がある。しかし、これらの数値がなければ、公の議論は従来の経済指標にのみ集中しており、これらの指標にもこれらの欠点がある。(略) ウエルビーイングの測定には常に妥協が必要である」(Alexandrova & Singh 2022, p. 190)。ウエルビーイングの測定が厳密であろうとすればするほど、その測定は複雑性を増し、逆に有用性が低下していくことになる。この有用性と妥当性（厳密性）との間のトレードオフの関係を受け入れたうえで、ではどこで妥協するのが妥当かの価値判断も、ウエルビーイングの科学には不可避に迫られるのである。そこで重要性をもつのが、やはり「親概念」としての「中位の理論」である。（日本の、本県の）子どものウエルビーイングとは何か、子どものウエルビーイングを向上させる中で促進すべき価値とは何か、といった理論的検討が継続的に求められる。本稿は、その端緒を僅かながら開くものであったと信じる。

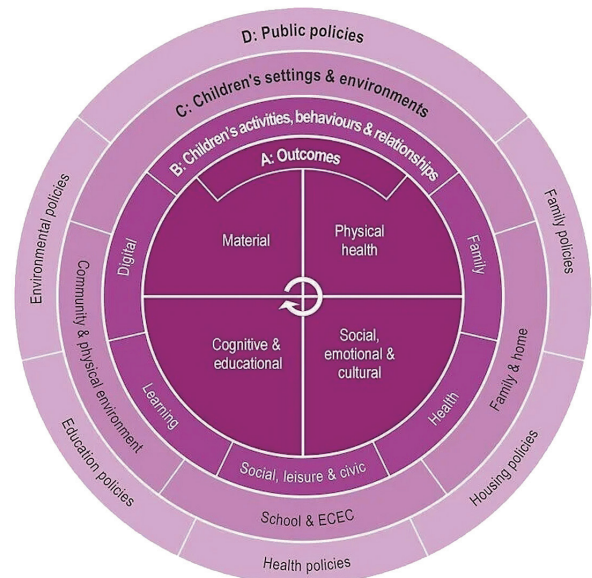


図2 子どものウエルビーイングの測定フレームワーク
【出典】 OECD 2021, p.17

引用・参考文献

- Alexandrova, A. (2012). “Values and the Science of Well-Being: A Recipe for Mixing” , In Kincaid, H. (ed.) *The Oxford Handbook of Philosophy of Social Science* (pp.625-645), Oxford University Press.
- Alexandrova, A. (2014). “Well-Being” , In Cartwright, N. & Montuschi, E. (ed.) *Philosophy of Social Science: A New Introduction* (pp.9-30), Oxford University Press.
- Alexandrova, A. (2017). *A Philosophy for the Science of Well-Being*, Oxford University Press.
- Alexandrova, A. & Fabian, M. (2022). *The Science of Wellbeing*, John Templeton Foundation.
- Alexandrova, A. & Singh, R. (2022). “When Well-Being Becomes a Number” , In Newfield, C. & Alexandrova, A. (ed.) *Limits of the Numerical: The Abuses and Uses of Quantification* (pp.181-199), The University of Chicago Press.
- OECD, 2021, *Measuring What Matters for Child Well-being and Policies*, OECD Publishing.
- ジョセフ・E. スティグリッツ、ジャンポール・フィトゥシ、アマティア・セン (2012) . 『暮らしの質を測る - 経済成長率を超える幸福度指標の提案』金融財政事情研究会 .
- 井上達夫 (2019) . 『普通の再生』岩波書店 .

(2022. 9. 2 受理)